

横井小楠と荻生徂徠
—思想の基底にある儒教文化と理想の社会像を巡って—

北 野 雄 士

Yokoi Shōnan and Ogyū Sorai :
On Their Fundamental Confucian Cultures and Their Images
of Ideal Societies

Yuji KITANO

はじめに

幕末に幕政の伝統的原理を批判して新しい国家の枠組みを構想した、熊本藩出身の儒者横井小楠（1809-1869年）は、30代に朱子学を集中的に研究し、人を治める前提として、指導者の心のあり方を問う朱子の「修己治人」の思想を生涯持ち続けた。小楠に先立つこと、143年前に江戸に生まれ、後に柳沢吉保の儒者となった荻生徂徠（1666-1728年）は、50代に古文辞学の立場を確立し、朱子が重んじた『四書』よりも、『六経』を重視して、「理」の観念を前提とする朱子の学説を徹底的に批判した。

このように二人は生まれた時代も場所も、朱子学に対する考え方も異なるが、政治思想に関しては、「堯舜三代」と呼ばれる中国古代の理想政治を政治の基準と見なすという基本的な共通点を持っている。

しかし、小楠は徂徠の学問を「功利」の学と見なして、日本の朱子学に浸透しているこの「功利」の傾向を厳しく批判していた。

先に触れた共通点にもかかわらず、小楠には徂徠の学問が「功利」の学と見えたのは何故だろうか。両者の思想の根本的な違いはどこにあり、それはどのような時代背景と理想の社会像に根差しているのか。本稿は、二人の思想と、武士論を中心とした政策論の比較を通じ

て、このような問いに答えようとする試みである。

第1章 思想の比較——朱子学に対する態度と安民思想

本章では、政治思想を含めて、徂徠と小楠の思想をそれぞれ概説し、その上で比較する。

第1節 徂徠の思想

荻生徂徠が生きた寛文から享保期は、表面的には平和と繁栄の時代であった。しかし、徂徠の目から見れば、武士の経済的困窮と社会的無秩序に覆われていた。彼は徳川綱吉に仕えた医師の家に生まれたが、父が主君綱吉の不興を買ったことから、14歳から27歳の13年間、江戸を離れて上総国で農村生活を体験する。この時期に、徂徠は儒学を独学するとともに、江戸の生活と農村のそれとを比較する視点を獲得した。

江戸に戻った後、徂徠は綱吉の側用人柳沢吉保の儒者となり、1717年52歳の頃には、古文辞学の立場を確立した。ここでは、古文辞学を確立して以降の彼の思想をまとめておこう。

まず、徂徠の古文辞学とは、16世紀の明の時代に一世を風靡した一種の古典復興運動（その代表的存在は李攀竜と王世貞）の精神を、儒教の經典の解釈に応用したものである¹⁾。この「古文辞」運動の綱領は「文は必ず奏漢、詩は必ず盛唐。是れに非ざれば道^いわす」というものであって、古典的な典型と自己との完全な一致を目指していた。徂徠はこの文芸思想を、文芸のみならず經典解釈にも適用し、宋代の朱子学の解釈を批判して、經典が成立した時代にできるだけ近い文献によって經典中の語句の意味を解釈していくことを主張した。

その結果、徂徠が獲得したのは次のような思想である。まず、彼は朱子学とは異なり、凡人は心の修養によっても聖人にはなり得ないとする²⁾。凡人は天より与えられた「能」を生かすことができるのみであり、またそれが何より大事である³⁾。一方、徂徠が聖人として挙げるのは、伏羲、神農、黄帝、顓頊、帝嚳、堯、舜、禹、湯、文、武、周公、孔子である⁴⁾。徂徠はこれらの聖人の背後に「天」を認め、天を敬うべきことを強調している。その聖人のうち堯から周公までが古代中国の「制度」＝「礼楽政教」の「作者七人」であり、孔子がそ

1) 古文辞学の説明は、吉川幸次郎の次の論文に依拠した。「徂徠学案」『日本思想大系36 荻生徂徠』所収、1873年、岩波書店、665-671頁。徂徠自身による古文辞学の説明は、『弁道』『弁名』の次の箇所にある。同書、11-12頁、170頁。

2) 同書、12、15、24-25、68、136頁。

3) 同書、18頁。

4) 同書、63-64、66頁。

れを集大成したと徂徠は考えている。この制度は最高のものであって、後世の人間はこの制度に従って人を治めることができるだけである。

徂徠によれば、このような制度は「詩書礼楽」のテキスト＝「文」に記述されている。これらの「文」には、古代の制度の具体的事実（＝「物」）が展開されており、「文」に習熟してこの具体的事実を自分のものにする（「物格^{きた}る」）が徂徠の学問の目標であった⁵⁾。そうすれば「思はずして得、勉めずして中る」境地に達するという。

徂徠は「制度」が人間をつくると考え、この「制度」の力で民衆が気づかないうちに平和で豊かな社会が実現されることを理想としていた。

以上のように、徂徠は聖人だけでなく、聖人が製作した古代中国の制度をも聖なるものと見なしている。但し、古代の制度をそのまま現代にもち込もうとしたわけではない。徂徠は古と今の間における制度文物の変遷を学び、今の民俗・人情に応じて古の制度を改変して用いることを主張した。

第2節 小楠の思想

小楠が生まれたのは、徂徠が死んで約80年後の1809年である。当時、日本近海にはしきりに外国船が出没し、欧米の脅威と海防の充実を説く者が相次いだ。例えば、1825年には水戸学会会沢正志斎によって『新論』が書かれ、広く流布した。正志斎は其中で、列強諸国に対抗するために、天皇を日本の宗教的精神的支柱にして、その下に民衆を結集させ、幕府は諸藩を先導して富国強兵に努めて国力を高めることを提唱している⁶⁾。

小楠は、このように日本が西洋文明と本格的に接触し始めた時代に生まれ、長年、熊本藩の藩校時習館で儒教や日中の歴史を学んだ。また、30代には郷土の先儒、大塚退野や平野深淵に導かれて、朱子学を集中的に研究している。それらから彼は、名誉欲などの社会的欲望を抑制し、自己に具わる「理」を全うして政治に臨むという修己治人の思想を獲得した⁷⁾。同時に彼は、海外情勢や水戸学にも強い関心を寄せていた。

1853年のペリー来航後は、中国で出版された世界地理書の翻刻版を弟子の蘭方医と講読し

5) 同書、35, 61-62, 170, 179-180頁。

6) 会沢正志斎『新論』、『日本思想大系63 水戸学』所収、1973年、岩波書店、49-159頁。

7) 小楠の修己治人の思想については次の箇所を参照。山崎正薫編『横井小楠遺稿』、1942年、日新書院、4-5, 89-90頁。次の拙稿では小楠の修己治人の思想を考察した。「大塚退野、平野深淵、横井小楠一近世熊本における『実学』の一系譜」、『大阪産業大学論集』、人文科学編、107号、2002年。宋学の「理」の概念に対する小楠の批判は、次の箇所で開催されている。前掲『横井小楠遺稿』、922-923頁。

たり、翻訳された西洋の兵書を読んだりして西洋文明の理解に努めている。

彼が思想の核にしたのは、「三代の治道」の理念であった⁸⁾。西洋文明に触れて以降、この理念に対する小楠の確信はますます強固なものになり、それを通じて西洋文明を受容していった。

「三代の治道」とは、小楠が儒教の經典の一つである『書経』から引き出した理念である。その内容を一言でいえば、民衆の豊かで平和な生活を図ることが為政者の義務であるというものである。彼にとってこの理念は堯舜三代の時代に生まれ、孔子によって受け継がれてきたものであり、彼自身もその道統を継ぐものであると自覚していた。

小楠は、変転する時勢の中でこの理念を時勢に則して実現しようとした。このことは彼によって「現在工夫の実」、「変通」などと呼ばれている⁹⁾。

このような思想を確立した小楠の目に、幕末の幕府の政治は次のように映っていた。参勤交代や大名の妻子の江戸在住の伝統、大名に対する国防強化の命令は、いずれも最終的に民衆の負担につながるもので、徳川家の安泰のみを考えた「私事」の政治に他ならず、民衆の生活を第一に考えるべき「三代の治道」に背いている¹⁰⁾。このように小楠は「三代の治道」を立脚点として当時の政治秩序を批判した。

さて、小楠は江戸時代の身分制度を否定してはいないが、儒教を学ぶことにおいては人間が対等であると考えていた。彼は弟子で蘭方医の内藤泰吉に、「士・農・工・商及び医、その職異なりといへども、苟も道を学ぶものは皆士なり」という言葉を与えている（1850年）¹¹⁾。これは僧侶や画工などととともに士農工商に入らない「方外」に所属するものとされていた医者の方外を激励するための言葉であるが、ここに表れている思想は小楠が福井藩の諮問に答えた「学校問答書」の中にも見ることができる。つまり、為政者と臣下は対等な立場であって、絶えず「三代の治道」を学び、その政治への応用を議論し、相手の非を互いに糾し合うべきだとするものである。彼はこの実践を「朋友講学」と呼び、君臣間のこうした関係が民衆あるいは夫婦の間にも浸透していくことを理想とした¹²⁾。このような思想は「三代の治道」の絶対的な妥当性に対する確信に支えられている。

この「三代の治道」という理念は、以上のように民衆本位の政治という思想と、その理念

8) 前掲『横井小楠遺稿』、923-924、926頁。「三代の治道」は、「三代の治教」、「堯舜三代の道統」など様々に言い換えられている。同書、23、40、508、618、901、905-906頁。

9) 同書、64、128、216、235、242頁。

10) 同書、38-39頁。

11) 同書、725頁。

12) 同書、4-6頁。

に預かる者の平等という思想を含むものである。彼はこうした理念を媒介にして西洋文明を受け入れていったのである。その受容の仕方は、無条件ではなく是是非非の立場であった。すなわち、小楠は民衆本位の政治経済制度を賞賛するものの、欧米諸国が各々の利害を追求する西洋的国际秩序については、これを批判し、儒教的道義が妥当する新しい国際秩序の樹立を唱えている。

小楠は、「三代の治道」の理念に基づき、欧米の文明も相対化して、西洋の科学や制度を導入して国力をつけ、将来は世界に儒教的道義を広めるという日本の未来像を構想していた。ここには、欧米諸国と交流しつつ、江戸時代の政治秩序を克服し欧米に従属しない新しい樹立を創設するための一つの道が示されている。

第3節 思想上の相違点と共通点

徂徠と小楠の思想を比較するにあたって、人間観、特に気質の変化の問題、それと関連する朱子学の「理」の説、さらに「天」の概念、その「天」の命令である「民を安んじる」という政治理念に関する二人の見解を取り上げてみたい。

まず、人間の気質の変化について。徂徠は、前述の如く「凡人」の気質が修養によって変化するという考え方を否定した。徂徠にとって賢人と凡人は、全く隔絶した存在であって、凡人は天から賦与された「能」を生かすことができるだけである。従って徂徠の立場からは、修養による気質の変化を前提とする朱子の修己治人論はありえない¹³⁾。

これに対して、小楠は「人間の心ほど変化しやすいものはない」と考え、心が動き始めた、まさにその時に名誉欲などの社会的欲望を断念すれば、「一心静定」して、いかなる事態にも対処できるようになると述べている。小楠は気質の変化を前提とする修己治人の思想を生涯持ち続けた。気質の変化については、徂徠と小楠の見解が対立していたことが分かる。

次に、修己治人の基盤となる朱子学の「理」の概念について。徂徠によれば、朱子学の如くに「理」が天によって我に与えられているとすると、人間は「いやしくも能く理を尽くさば、則ち天は我に在り」というような傲慢な心持になり、天を敬う心を失う。そして人間は自己を基準にしてすべてを判断してしまうようになる¹⁴⁾。

一方、小楠は長年朱子学の「理」の概念に疑いを感じることなく、議論を進めていた。しかし、50代半ばになると、徂徠とは別の理由でこの概念に疑問を抱くようになった。すなわ

13) 前掲『日本思想大系36 荻生徂徠』、11-12、16-17、21、24、26、28、33、35、40-41、55-57、68、72、84、93、97、105、120、122-123、136、151-152、158、166、168頁。

14) 「理」に対する徂徠の批判は、同書、28、97、120、151-152、168頁参照。「理」に対する小楠の批判は、前掲『横井小楠遺稿』、922-923頁。

ち、1865年盟友の元田永孚に対して、彼は朱子が大きな影響を受けた北宋の儒者程伊川の「理」について、それは観念的であって、万物の利用厚生に役立たないと批判している。むしろ『書経』に描かれている古代中国の伝説的な皇帝たちが行った治水事業や交易政策などの万物の利用厚生政策の方が、实际的で有用だと述べている。小楠は、皇帝たちのこうした行動原理を「畏天経国」の思想と捉え、この思想によって自らの殖産興業論を根拠付けた。理由付けは異なるが、小楠も徂徠と同様、晩年には宋学の「理」の説に疑問を抱いていたことが分かる。

しかし、「理」に対するこうした疑問は、小楠の場合これ以上展開され深められることはなかった。小楠は、天から人間に完全なる本性、すなわち「理」が付与されていることを前提として認めた上で、「修己治人」の思想を発展させていったのである。但し、理論的には道德上の「理」と科学技術上の実践的「理」とが彼の内部で、分裂し、自立化する恐れがあったといえる。

さて、「天」については、徂徠も小楠もこれを敬うべきことを強調する態度において一致していた。だが、徂徠が天を父母あるいは祖先と一体のものと見なしているのに対して、小楠にはそうした思想は見当たらない¹⁵⁾。

最後に、天の命令としての「安民」思想に触れておこう。徂徠も小楠も「民を安んじること」あるいは「天下を安んじること」をもって、天から命じられた政治の究極目的だと考えていた。安民思想は、儒教の經典に描かれた神話的な古代中国を理想とする「先王の道」(徂徠)あるいは「三代の治道」(小楠)に由来する。二人がこのような思想を共有していたのは、『六経』の一つである『書経』をともに重んじていたためである。両者の政治思想は、このように抽象的な理念のレベルでは完全に一致している¹⁶⁾。

以上のように、気質の変化の問題を別とすれば、徂徠と小楠は思想的にかなり近い位置にあることが分かる。だが、中心的な政治理念である「安民」の具体的内容になると、違いが現れる。この点を明らかにするには、両者の政策論に踏み込む必要があるので、次章でそれを論じたい。

15) 徂徠の天の思想は前掲『日本思想大系36 荻生徂徠』、66, 73, 96, 120頁、小楠の天の思想は、前掲『横井小楠遺稿』、11, 885, 908, 922-923頁参照。

16) 徂徠の安民思想は、前掲『日本思想大系36 荻生徂徠』、12, 17, 21, 44, 54, 76, 81, 135, 164, 184-185頁参照。小楠の安民思想は、前掲『横井小楠遺稿』、39, 903, 922-924頁参照。なお、小楠は『六経』のうち『礼記』や『詩経』も重んじていた。同書、578頁。

第2章 政策の比較——「安民」のための政策論と武士身分論

徂徠と小楠はともに「民を安んじること」を政治の目的として、当時の幕政を批判し、その改革に積極的に関与しようとした。幕政改革のための両者の政策論は多岐に渡っているが、本章では、「安民」思想と最も密接な政治秩序論と経済政策論、及び「安民」の担い手としての武士身分論に焦点を絞って比較してみたい。

第1節 政治秩序論

まず政治秩序に関して言えば、徂徠は治安を、小楠は、国際社会における日本の独立を重く見た。これは、二人が置かれた時代の位相の違いに基づいている。

徂徠が活躍した元禄から享保期は、外国の脅威のない平和な時代だった。しかし国内的には江戸に農民が流入し、治安が悪化していた。この問題について徂徠は、奉行所を地域ごとに分割して取締りをきめ細かにして、人の流入を監視するなどの対策を説いている¹⁷⁾。さらに治安問題の抜本的解決策として、戸籍制度の整備によって人々をそれぞれの土地に結びつけ、移動を厳しく監督することも提案している。このように徂徠の関心は、国際秩序より治安という意味での国内秩序に向かっていた。

これに対して小楠が生きたのは、文化年間から明治の初めにかけてで、欧米諸国の脅威を抜きにしては語れぬ時代であった。18世紀末から日本近海に欧米の船が出没し、1853年にはアメリカからペリーが東印度艦隊四隻を率いて浦賀に乗り込んできた。当時の日本は、欧米諸国間の植民地獲得競争に巻き込まれる恐れがあった。小楠は日本の平和のためには、国際平和が大前提だと考え、「国家理性」の利害に従う西洋的な国際秩序ではなく、儒教的な道義観に基づく、戦争のない国際秩序の樹立を提唱した。日本が産業を興し、海軍を創設して国力を高め、国際平和に貢献するというのが、彼の描いた未来の日本の役割だった¹⁸⁾。もちろん、小楠は国内秩序を軽視していたわけではない。佐幕派勢力と尊攘派勢力の間での内戦を回避し、国論統一のために尽力したのである。国内の治安についても同様に、軽視はしていなかっただろうが、彼にとっては何よりもまず内戦を回避し日本の独立を維持することこそが緊急の課題であった。

17) 荻生徂徠『政談』、1997年、岩波書店（岩波文庫）、250頁。『政談』の理解について、石井紫郎『日本人の国家生活』、1986年、東京大学出版会、271-279頁の記述に影響を受けた。

18) 前掲『横井小楠遺稿』、11-14、22-23、906-911頁。

第2節 経済政策論

経済政策について、両者の相違を一言でいうなら、徂徠は民衆、特に農民の生計の維持を重んじたのに対して、小楠は民衆の富の増大を唱えたということになるだろう。

徂徠には農本主義的傾向が見られ、貨幣経済に向かって行く時代の流れをあえて押しとどめ、米本位の経済の復活を図った。そこで彼は、武士が農村に帰り、勸農に努めること、さらに民衆の生活の奢侈化を阻止し物価を下落させるために、偶然の産物が慣例化したに過ぎない「格式」を廃して、人々の交際のルールを簡素化することを主張した。これによって身分の低い者でも身分相応に質素な生活が送れるようにしようというのである¹⁹⁾。また徂徠は、物価の高騰について、年貢として納入された米の半分を大名が手元に置くことによって鎮静化できると述べている²⁰⁾。彼が農民の生計を重視したのは、年貢に依存する武士身分層を維持するためでもあった。

しかし、徂徠は商人については全く冷淡といってよく、将軍家が、必要な物資を商人から買い上げることを中止し、無料で納入させることを勧めている。彼はこれによって商家が潰れてもかまわないと考えていた。

一方、小楠は、西洋の影響を受ける以前から民衆の富を重視していた。すなわち、彼は私淑していた熊本の二人の儒者、大塚退野と平野深淵と同じく、武士ではなくまず農民を富ませる農業政策を主張していた。1860年には、福井藩に対して藩政の原則を示した『国是三論』を献策し、藩政レベルではあるが殖産興業政策の採用を提案している²¹⁾。ここには1850年代に小楠が学んだ西洋諸国の経済政策の影響が見られる。彼は、福井藩で、福井藩士三岡八郎（後の由利公正）の協力を得て、藩営の商社を創立して生糸などの物産の生産を奨励した。小楠は後に民富論を藩政レベルから日本一国のレベルにまで引き上げ、幕政改革に応用するとともに、明治政府の経済政策を先取りした。西欧と同じように民衆の富を拡大させることで国力を高めようとしたのである。

以上のように、徂徠が米本位の経済を復権させ、農民と武士の生活の安定に重点を置いていたのに対して、小楠は、農村にも浸透する商業経済の潮流に乗って、産業を振興し民富を増大させることを主張した。

19) 前掲『政談』, 88, 127-135, 151-156頁。

20) 同書, 133, 161頁。

21) 前掲『横井小楠遺稿』, 32-37頁。

第3節 安民思想と武士身分論

さて、徂徠と小楠が支配者である武士層の現実と未来についてどのように考えていたかを検討したい。

まず徂徠の場合、父は医者であるが、父方母方とも武士の家系であることに誇りを持っていた。徂徠が当時の社会を分析しその改革の方策を述べた『政談』（1726-1727年執筆）の中には祖父母から聞いた話が度々出てくるが、そこには古きよき時代の質実剛健な武士の生活へのノスタルジーが感じられる²²⁾。

この『政談』で提案された政策を見ると、将軍を頂点とする武士層の支配を強化し、将軍の下で日本の「中央集権化」を推進していこうとする意図を読み取ることができる。当時、日本では経済的に没落しつつある武士層が政治的な支配権を握っていたが、放っておけばその権力は次第に危ういものとなるだろう。徂徠はこれに抗して、武士の経済的没落をできるだけ防いで、その政治的支配権の強化を図ったのである。

そのために彼が掲げた政策としては、(一) 将軍による領地の物産の召し上げ、(二) 「旅宿の境界」にある武士の農村居住、(三) 武士層と町人・農民層との身分的区別の厳格化、(四) 家柄ではなく実力による人材登用などがある。

(一) について徂徠は、将軍家の財政窮乏の原因をその家計の全面的な消費経済化、すなわち必要なものをすべて買い上げていることにあり、こうした買い上げをやめ、必要な物資を無料で召し上げるようにすべきだと述べている²³⁾。

(二) の武士による農村居住の提案は次のような現実認識に基づいて行われている。すなわち、武士の窮乏化の原因は、武士が城下町で「旅宿の境地」にあり、生活のほとんど全般にわたって消費生活を送っていることにある。そこで徂徠は一般の武士について、その領地である農村に住まわせ、農民を直接治めさせることを提言した²⁴⁾。農村生活の効用として、安上がりであること、農民が居住してきた武士に親しむことによって、結果的に武士の農民掌握力が増大すること、武士の身体が鍛えられ山河の地理に詳しくなることなどが挙げられている。こうした一石三鳥の効果を通じて、古きよき時代の武士を復活させようというわけである。彼はいわゆる「堯舜三代」時代の古代中国のみならず、武士が農村に居住した質実剛健の時代の「日本」にも理想の姿を見ていた。

(三) の武士と平民との身分的区別は、武士が窮乏する中で、彼らの身分を守るためにど

22) 前掲『政談』、75頁。

23) 同書、111-112頁。

24) 同書、74-78頁。

うしても必要な措置であった。徂徠は偶然出来上がった慣例に過ぎない「格式」を廃止して、身分秩序を示す簡素な礼の導入を提言している²⁵⁾。より分かりやすい形で、武士と平民を分け隔てようというのである。彼にとって服装による身分的区別のない社会は、耐えられないものであった。

(四) の実力主義による人材登用について、徂徠は家柄の低い武士だけでなく、商人や農民であっても実力がある者は、武士に取り立てて高い地位につけるべきだとしている²⁶⁾。一見したところ、これは(三)の身分的区別の厳格化と矛盾しているようだが、彼の意図は身分をなくすのではなく、あくまでも武士にして取り立てることであるから、矛盾してはいない。明言はされていないが徂徠の見解を敷衍すると、門閥制による人材登用が続けば、有能な人物が武士層の下層、あるいは平民層に滞り、その不満が反乱を引き起こし、幕府の存亡にもかかわりかねないということになる。それを回避するには、絶えず武士の上層に指導力のある有能な人材を送り続ける必要がある。そうすることで武士層の統治能力が上昇し、武士層全体が支配階級にとどまることを彼は望んだのである²⁷⁾。

また徂徠は、門閥主義の完全な排除を唱えたわけではなかった。一人でも下から有能な人材が上がってくれば、すでに中枢にいる門閥出身の者も刺激を受け、競って仕事をするようになるだろうと述べている²⁸⁾。彼は、完全な実力主義を主張したのではなくて、統治に携わる武士の世界に新しい風を吹き込もうとしたといえるだろう。

以上の献策のうち、将軍家による物資の召し上げ、身分秩序の明確化、実力主義による人材登用は、古代中国に範を取っており、武士の帰村策は、武士がまだ農村に土着していた時代の日本をモデルにしている。徂徠の改革論は、昔の中国と日本をモデルとして同時代の社会に合わせて改変したり取捨選択したりして、将軍家による支配と武士が最高位に置かれる身分制とを維持しつつ、社会の再秩序化を推進しようとするものだった。

このように、徂徠は、武士身分層の維持とその支配権力の強化を目指していた。では、小楠は武士層についてどのように考えていたのだろうか。前述したように、彼は「三代の治道」を学ぶ限りで、人間は平等だと考えていた²⁹⁾。小楠は、門閥制、世襲制度を厳しく批判し、徂徠と同様に新たな人材の登用を主張している³⁰⁾。人材の集まるところにこそ政治的勢力が

25) 同書、99-108、151-158頁。

26) 同書、210頁。

27) 同書、202-204頁。

28) 同書、207頁。

29) 前掲『横井小楠遺稿』、880頁。

30) 同書、89、93、97、226頁。

生じる、というのが彼の考えである。それゆえ欧米列強に対抗しこの困難に対処するには、幕府がいまだ活かされずにいる人材を登用すべきだと訴えたのである。

しかし、小楠は武士身分の廃止や身分制度そのものの撤廃までは考えていない。むしろ武士の存在を前提として、彼らに新たな役割を与えようというのが彼の目論見である。

この議論は『国是三論』（1860年）の「士道」篇で展開されている³¹⁾。この篇のテーマは、どのような武士を育成するかという問題である。小楠によれば、当時の武士は經典の暗記や文章の表現技術、あるいは武芸のような「末」の術にかまけて、「本」である修己治人の工夫を忘却している。武芸のたしなみは武士である以上当然であるが、武士はそれに加えて常日頃から、己れのありようを反省し、己れを修めて人を治める方法を自得し、天下の変乱に「一心静定」に対処できるようにしておかねばならない。小楠はこのような武士の範例として北条氏長、小幡景憲、柳生宗矩、宮本武蔵などの有名な軍学者や武芸者を挙げ、彼らが兵学や剣術のみならず、己れを修め人を治める経論の道に明らかであったと述べている。

さらに小楠は、同じ『国是三論』中の「富国論」において、本多正信を初めとする徳川幕府の名臣達が徳川家の安泰のために尽力するだけで「天下生靈」のことを念頭に置かなかったと批判し、家の安泰ではなく「天下を安んじ庶民を子とする」政治をおこなう武士を育成することを福井藩の政治方針として提案した³²⁾。彼は、常に民衆のことを考え、天下を安んじるという役割を武士に与えようとした。小楠は、お家の安泰ではなく「公に奉じ下を治める」役割を果たす武士の育成こそ大事と考えていたのである。

ここで、徂徠と小楠の武士論をまとめて比較しておこう。共通するのは、両者とも統治能力のある武士の必要性を感じていたことである。

相違点の第一は、徂徠が武士身分層の維持を念頭においていたのに対して、小楠は武士の存在を一応前提として議論を進めていることからして、武士層を否定したわけではないが、その維持にはこだわらなかったという点である。小楠の思想体系においては「三代の治道」が最高理念であり、民衆の豊かで平和な生活の実現こそが目標である。従って、理論的には武士層の存在が民衆の生活を脅かすようになれば、その廃止を主張することもありえないことではない。もちろん小楠は身分制の廃止について具体的に何も語ってはいない。だが、彼の思想にはそうした方向へ向かう可能性が秘められている。

第二の相違点は、幕府に対する態度である。徂徠は前述のように將軍を頂点とする幕府の権力増大を図って様々な施策を提案した。また、幕府の創設者家康に対して極めて好意的で、

31) 同書、49-56頁。

32) 同書、38-39頁。

家康の政策や態度にたびたび賞賛の言葉を贈っている³³⁾。小楠の場合、倒幕派のように幕府の転覆までは考えていなかったようだが、民衆のためには幕府の改革も厭わないという考え方であった。その改革の柱の一つが、将軍に京都の朝廷を尊重することを求めるというものであった³⁴⁾。ここでは天皇を中心とする新たな国づくりが構想されている。ただしこの場合、天皇は神格化されず、天皇自らも「三代の治道」を学びそれに服して、「三代」の皇帝たちのように家臣と協力の上、民衆を治めることが期待されていた。

以上、武士論を中心に徂徠と小楠の政策論の比較を行った。両者はともに統治能力のある武士の登用を大事と考えているが、徂徠の場合、その主眼が武士層の支配強化にあり、その結果として民衆に治安と安定した生計の道が与えられるというものである。これに対して、小楠は民衆の豊かで平和な生活の保障が第一原則であり、その手段として修己治人の道を実践しうる武士の育成がある。武士という身分層の維持にこだわるか否かが両者の分岐点だといえよう。

次章「結語」では、これまで述べてきた徂徠と小楠の政策論を整理し、それぞれの政策論の背後にある時代背景と理想の社会像を考察したい。

第3章 結語——政策論の背後にある時代背景と理想の社会像

徂徠は、16世紀中国の古文辞の運動に出会ってから次第に朱子学を批判する立場になった。小楠は、晩年西洋の科学と矛盾する朱子学の「理」の説に疑問を抱くようになったものの、総体的に見れば、「修己治人」という朱子学の理念に忠実だったといえよう。しかし一見したところ思想的に相容れない立場にあるように見える両者だが、どちらも儒教の古い経典『六経』の一つ『書経』を重んじ、その「体得」を目指していることから、特に政治思想に関しては共通項が多く見られる。すなわち、堯舜三代の政治を理想とし、天の思想を持ち、「民を安んじること」を政治の究極目的にしていたことなどである。

だが、実際に提案された政策の内容とその目的は大きく異なっていた。本章では、二人の政策論を整理し、それぞれの政策論がどのような時代背景の下で提案されたのか、どのような社会を実現しようとしていたのかを考察して本稿の結びとしたい。

まず、徂徠は、武士層が将軍の下でその支配を強化してゆくことを第一の目標とした。そのために、都市での治安対策、農村から都市への移動の規制、農村への武士の移住による農

33) 前掲『政談』, 239-240, 244頁。

34) 前掲『横井小楠遺稿』, 97-99頁。

民統制の強化などが提案されている。

徂徠の経済政策としては、将軍家の「召し上げ政策」、米価維持政策などが挙げられる。前者は、将軍家の財政難解消のため、将軍家に必要な物資を民衆から無償で提供させるというもので、商人・農民の犠牲をも厭わない強硬策である。後者の米価維持政策は、米価に依存する武士と農民の生活の安定を狙ったものである。この背景には、徂徠が『政談』を執筆した当時は米価が低い時代であったという事情がある。

身分制についての徂徠の提案は、武士層の維持・強化が第一の目的である。すなわち、簡素な礼式の導入、武士と町人・農民との身分的区別の厳格化、家柄ではなく実力による人材登用などの提言は、どれも武士層を維持しその統治能力を高めるための手段であった。また、武士の農村移住、米価維持政策は、武士の家計を助け、経済的没落を防ぐという意味合いを持っていた。

以上のように徂徠は、武士層の経済的没落をくい止め、将軍を頂点とする武士の政治的支配を強化し、それを通じて「民を安んじる」という為政者の責任を果たさせようとしたのである。『政談』の中で徂徠は、地方の代官の仕事が年貢を取ることだけになって、「治めること」を忘れていると嘆いている³⁵⁾。支配者の力の増強は、すなわちその責任の増大でもある。彼はその点も強調している。徂徠は「尊き責務」(ノーブレス・オブリージュ)を遂行できる武士の登用を求めている。

次に、小楠が提案した個々の政策の関連を考えてみよう。

1860年代に彼が構想した政治体制は、天皇の下に将軍と大名が結集し、外様、譜代に限らず人材を登用して幕府の要職につけて富国強兵を進めるというものである。軍制については、洋式による編成と、海軍の創設が主張されている。小楠はこのような挙国一致の政治体制と軍事的実力によって欧米諸国に対して日本の独立を維持し、将来は国力をつけて国際社会においても儒教的仁義を確立しようとしていた。

経済政策においては、小楠は徂徠とは異なり、米の生産、流通ではなく、農村の商業的農業に注目した。農民は江戸時代、年貢にほとんど取られる米ではなく、商品作物の生産に力を入れて、作物の加工、販売によって貨幣を獲得するようになっていった。小楠は、福井藩士の三岡八郎を使って、藩当局と大商人とで商社(「物産総合所」)を設立し(1859年)、農民に「生産資金」を貸与して、藩内の商業的農業を奨励するとともに、藩内から集めた生糸や茶などの生産品を外国や他藩に売らせた。こうして藩の物産販売ルートが世界に拡大し、福井藩には巨額の利益が入ることになった。このように経済的実力を得た福井藩は、雄藩と

35) 前掲『政談』, 18頁。

して幕末の政治史に登場したのである。小楠が後に主張した日本一国の規模での殖産興業政策は、この福井藩における経験が基になっている。

武士について「公に奉じ下を治める」役割を期待した小楠は、武士の統治能力を重視する点で徂徠と見解を同じくしている。しかし、彼には徂徠のように武士身分を維持していこうとする明確な意図はなかった。むしろ、思想的には「三代の治道」を学ぶ限りにおいて万人が平等であるとするなど、平等主義的傾向が強い。但し、身分制度の廃止を明確に主張するまでには至っていない。

商業的農業を奨励し、民衆を豊かにし、加えて物産の輸出によって国力・軍事力の増大を図りつつ、欧米諸国と対等に交際するというように、小楠の提唱した政治体制と経済政策とは密接な関連性を持つ。武士が家のためではなく天下の「公共の政」のために、政治においても経済においてもリーダーシップを発揮することを小楠は期待していた。

徂徠と小楠の政策論をまとめてきたが、最後に、その時代背景と政策論が目指す理想の社会像を明らかにし、二人の違いを考察してみよう。

徂徠が『政談』を書いてから、小楠が幕末に『国是三論』を書くまでには130年以上の年月が流れている。その間に幕府の力は弱まり、1853年のペリー来航以来、国際情勢は緊迫していた。農村には貨幣経済が浸透し、農民は商業的農業によって貨幣を獲得、富農層と貧農層との階層分化が進行していた。大都市の株仲間編成された商人は巨大な力を持つようになったが、彼らは農村を地盤に力をつけてきた在郷商人に次第に追い上げられるようになっていた。

徂徠は時代の流れに抗して、低迷する米価の引き上げを図り、武士の経済的没落を食い止め、さらに都市と農村における武士の支配力を回復して、將軍中心の強力な政治体制を創出しようとした。当時は、国際的緊張はほとんどなかったため、彼は内政問題に集中することができたのである。従って徂徠の政策はいわゆる「鎖国」を前提とした、閉ざされた環境における武士支配の永続化を目指すものであったといえよう。

これに対して、小楠は欧米列強の脅威が迫り来る時代に生きていた。その中で日本が独立を守り通すには、欧米の政治をモデルにして新たな国造りが求められる。欧米に対抗しうる強い国を造るには、権力の集中、国民軍の創設と、それを支える経済力の向上が必要である。小楠の提案は、国が商業的農業を奨励し、物産を外国に輸出することで、民衆を潤し、さらには国家の財政を豊かにすることであった。当然、豊かな財政は日本の軍事力を高める。その場合の政治機構として、彼は天皇の下に將軍と大名が集まる形の「挙国一致」政府というシステムを提唱している。武士身分層の存在意義を脅かす国民軍については論じられていないが、小楠が提案した海軍の組織は、「匹夫」といえども能力があれば一艦の長、一軍の將

にも登用するというもので、少なくとも武士層内の身分的格差を突き崩す可能性をもっていた。小楠の政策は「開国」を前提とし、欧米諸国との対等な関係をめざすものであった。

徂徠と小楠の政策論は、対外関係や経済の動向など背景となる歴史的条件の違いから、最終目的となるものやそのために構想された政治体制も大きく異なっている。だが、支配者としての武士層にその統治責任を果たさせようとした点においては、軌を一にしていたといえる。

しかし、武士層に対する両者の態度には決定的な違いがあった。それは徂徠が小楠より武士層に対して強いこだわりを持っていたという点である。

徂徠は『政談』の中で、祖父母が聞かせてくれた昔話を記しているが、そこからは武家の出身であることへの誇りと武士が農村で地域の支配者として堅実な生活をしていた時代への憧れが感じられる。青少年時代に長年にわたって田舎暮らしを余儀なくされるなど、苦勞の多かった徂徠を支えていたのは、武士としての誇りだったと思われる。それだけに、13年ぶりに戻った江戸で彼が目目の当たりにした武士層没落の傾向は耐え難いことであっただろう。『政談』はこうした武士の復権のために書かれている。

これに対して小楠の場合、理念上では身分にこだわらない平等主義的傾向が顕著で、民衆の豊かで平和な生活が保障されれば、たとえ為政者がどのような階層であろうと問題ではなかった。小楠はすでに武士層に属する自分の利害を超える可能性のある地点に立っていた。彼は世襲制を嫌悪し、アメリカの大統領制を高く評価している。但し、現実に提案した政策では、武士層の存在を前提とし、その能力の活用を考えていた。

徂徠は修養による気質の変化を信じることなく、將軍家の権力強化と武士身分層の維持という自らの利害関心に忠実に政策論を展開した。小楠が徂徠の学問を「功利」の学と呼ぶのは、このように修養を否定し、將軍の権力を強化し統治者たるべき武士層を維持しようとする自己の利害に忠実な徂徠の学問のあり方を指している。これに対して、小楠は絶えず「私」の利害を禁欲することを、自己に対して、さらに將軍、老中、大名、一般の武士層に対して要求した。小楠は思想的には、日本の独立と発展のために、個人、家、幕府の利害だけでなく、場合によっては帰属集団である武士層の利害を超えることも要請しうる立場に立っていたのである。

小楠にとっても武士が統治責任をまっとうすることが重要だった。しかし、小楠にとっては統治責任を果たせる階層であれば、必ずしも武士層でなくてもよかった。小楠のまわりには武士だけでなく豪農の子弟も集まっていた。

民衆に対する目線言えば、徂徠は支配者である武士の側からのそれであり、民衆の生計が維持されればよかったのに対して、小楠の場合は民衆寄りであってその豊かさを重視して

おり、帰属集団たる武士層ではなく民衆が支配する社会の展望ももっていた。二人の根本的違いはどのように二人が実現しようとする社会像にあったといえよう。